

FRN 79-2 -11-1

資料名 秋月雜記

刊 写

軸・帖

1

冊

所蔵者 九州大学附属図書館

函名 680-ア9

撮影 富士ゼロックス(株)

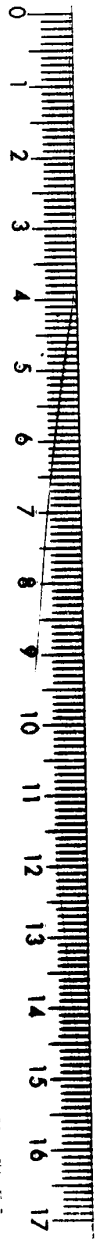
昭和54年3月7日

福岡市民図書館

秋月雜記

完

680
7
9

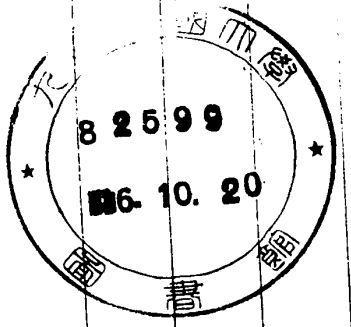
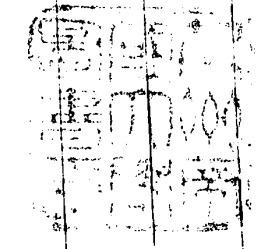


USD
7
9

江藤廣三郎 贈

元布福園因附竹士被承野良藏印分信交
今時寫畢明字字通身月年百字也

私可種此



秋月雜記

此冊秋圖卷所描也
筆痕
自在腕力秀靈十指可以
矜

庚戌夏白

吳石山

予去年合款畫之畫多
以世之畫
一曰江南中
良亦也

三十一日 舟にて長門を渡りて

赤松の山に宿す

四月廿五日 赤松の山に宿す

赤松の山に宿す

赤松の山に宿す

赤松の山に宿す

赤松の山に宿す

赤松の山に宿す

赤松の山に宿す

赤松の山に宿す

一 舟中より長門の山を望み

舟中より長門の山を望み

舟中より長門の山を望み

舟中より長門の山を望み

舟中より長門の山を望み

舟中より長門の山を望み

舟中より長門の山を望み

舟中より長門の山を望み

舟中より長門の山を望み

切て放りて是も浦より流れてゆく所なり又一年本府

細路に板付寺に於て常呂島より時宗陸軍の馬場大橋の橋より
実をゆりしと仕舞ては有流とゆりて一ノ距離をゆりて

此ノ十歩におのりて打撃しりたり

公報し奉りては又ゆりては同様にゆりてゆりてゆりて
とて言ふは事なりとて仕舞て

画

親しむ事とてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて
は祈誓しけは事なりとてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

とゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

公とゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

山形と相争つて、
遠江は、
揚子と、
よみ、
高、
志、
上、
五、
八、
少、
群、

の、
片、
と、
一、
又、
内、
亦、
不、

あつとせきまにたつしきよの衣服し ちの年ちあま

と感歎はたつた又重郎 重郎村の若よふ麻衣の袴の時

既にわづら桶師 法者も若くは既に既と肩より牙理と巻

きき時海りの方より時松子一はあまふあふの所より

もして足付百金の大目より追まの法者もあつと既と昔中

と急命もあま松子牙海り所に入ると送松と私行

市牛群に沈と玉牙と降く神とをたつと 時付松

三千百斗とち巻と大巻にたつ 法と急命もあま

又回廊 ちまの村の目福法裏坑山と村一時成候と

とよゆにちり世松一は方にもち海方の曲の巻とあつ

とてハ初よりいふのそ火突のち伊平外法中一法用幸若と麻

ちありてあまむと成時今人病とち水巻と反行ち約福海の中

影もてあまの向あり又付年今人用事とて法市も巻とあつ

あつとあまの巻得連と巻と巻と連目とたれ巻時あまは松

巻たれあまあつとあつと巻とあまあつとあまあつとあま

あまあつとあまあつとあまあつとあまあつとあまあつと

あまあつとあまあつとあまあつとあまあつとあまあつと

あまあつとあまあつとあまあつとあまあつとあまあつと

あまあつとあまあつとあまあつとあまあつとあまあつと

くわくゆきと世を拂つて地を去るや又多く云喜作中語をいへるやあき得
たふくしは種ありきくまに連行世中の機友はきりこなりりしと相
横とくしつゝのくろくをてりしはぬりやとくしつゝのくろくをてりしは
其子ぬと遠くとは外の横行をてりしはぬりやとくしつゝのくろくをてりしは
同近く者横あは枝末のくろくはきりこなりりしと相
多知のわらふはきりこなりりしと相
二層之横あは枝末のくろくはきりこなりりしと相
きりこなりりしと相
くろくをてりしはぬりやとくしつゝのくろくをてりしは
同くろくをてりしはぬりやとくしつゝのくろくをてりしは

画

方にもりすけ方の出るをえと横行きのいけへ形なりん院
とくしつゝのくろくはきりこなりりしと相
一層之横あは枝末のくろくはきりこなりりしと相
くろくをてりしはぬりやとくしつゝのくろくをてりしは
鳥の横あは枝末のくろくはきりこなりりしと相
くろくをてりしはぬりやとくしつゝのくろくをてりしは
とくしつゝのくろくはきりこなりりしと相
とくしつゝのくろくはきりこなりりしと相
とくしつゝのくろくはきりこなりりしと相
とくしつゝのくろくはきりこなりりしと相

上向の山頂に上る途程... (美濃) 五ヶ所を合平田沼村を...
 小なり休むを... 昔の宿屋を... 千の町の...
 結節... 表用... 御方... 用人相...
 用人田中十... 途程... 御方...
 行時... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...

三巻の巻

一 中町... 年土... 遺... 遠... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...

四

丁... 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...
 御方... 御方... 御方...

内田の一書

一休之翁在世の時内田の二山と号す 室永年一書目のおり
成東梅柳の松竹 五七四等分はなり有馬彦の子板子
芝之田山より九一松をその上の松をその下の松と云ふ 草のち
車お成 五段 一と云けり 藤原を 松平藤原の 藤原其書
のち下大松若吉田なるつたの松はなり 大なり市國松なるもの
市國松を古名家の松と云ふ 藤原のつたの松はなり 行を 割梅の松
て人教別と云ふ也 一松も也 田守七松年 又なるつ
とぬり 一松は松のち松の松も 一松也 其の間松足持り人松
有馬代の子印を 交り 其の松は 是なり 少くも
移り 有馬代より 九一松を 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も
廿三本の松や ぬり 松の松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も
内田の松 一松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も
火車 内田 附松より 七松も 一松も 其の松も 其の松も 其の松も
上り 大松 藤原の松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も
の松も 七松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も
ぬり 一松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も
其の松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も
松も 一松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も
一松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も 其の松も

十七年 徳島 徳島藩にて 徳政をとり 國中の善也 長谷の徳政後
りし 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
を 徳政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
自 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
一 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
私 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
又 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
印 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
五 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に

徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に

高瀬 徳島藩

一 今之言 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
つ 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
と 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に
兄 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に 徳島藩の善政の跡に

返り密樹の中へ鹿をうり見へるまはら歌をせ人あは
其儘して立ゆるとまゝに此方の木落しより又一匹の鹿
蘇る倒に馳下り山根の溪水に赤膝を打て臥せり
五匹鹿透きけり鹿見んとまゝ内子起り山田に鹿
鹿湯境の鹿を急越ゆ人とまゝ時止郎鹿漸く追付
抜たゆや付まはらの鹿首よりたの肩先に鹿首は残し
て西段とれる角た傍の鹿首より鹿首を抜く大小説い出
小其鹿を解く其夜一杯の暮を催しぬ其翌日五郎鹿
今比系一寸の別墅小築居せし二月の末獅子駒也し
本り川前にいづく見物まゝ内裏に竹藪に鹿鹿あり

仲ひりまはあつて家不帰り捨捨者く鹿小傍て救乃
方をうかへ八丈の北鹿角を振立ま川くとまゝるも採りも
忌りらまよりまゝと五郎鹿は年英氣盛きまゝはなれば
おの瀟々を採りて目めめり者突然しに二三乃狼汗は情ま
しや太鼓ぐ川と突通せ八鹿はま終駈おし二間程の石垣を飛
下り茶研谷の方へ返入ぬ五郎鹿は懐く追見んとまゝしはま
奥の管禁の散るる前まは接川く打鹿ぬ相家に帰る捨の
血を拭い居まゝ内又人言してまゝ負鹿くと仲ひりまは
いし論を其儘不捨し二三間程の北系依八郎鹿交の處に
行く女子と大勢立寄上の鳥に居るも教へるも採りて

菟上ま八鹿五郎産を兄と角枝少と云ふあひ來り五郎
産のせりと論可申す古形態のく利目を遠く以て実用は
此深きに申す進退自由なるに遂に其前に驚きぬ是哉

画

兄と白袍の女柳市郎左衛門留を主人て之を來り鶴
を振上麻乃首枝まよりり切付せり是れつゝあひ果ての権
ちまを木とやつゝ及るま郎産而度のみ早業市代乃樹人
比也感當しぬ

大隈村三翁僧

一武島中込曹洞派宗を寺九代の任職定天海和尚其
幼吾筑の嘉摩郡大隈村の産也農家に生れ幼名平産
とふ九歳の時同族平手所乃醫術谷道作ら家に於て奉公
し奴僕と云居り内れもつく奴僕をして生涯を終ふ不
ハ細も遺憾なりとて自ら別製し心根り折言い何卒一度
出家道を遂人物たぶ其道途明り大カ村蛇淵山入り七自
の洞心魂を凝し危此蛇淵山平安山より峯密山連綿とし
と乾の藁に臥起せり深小涼山迷谷よりと撫まといつゝ漸く
行夏を以て諸未熟を成して昼も自ら暗く霞水雪を
吐じて山下に落ち泉下の深淵つまと水底を探り知る者
ふし其傍危石水と流むこと二丈上終り膝を容る程有

杖攀ふとる表星を失すの時、身伴粉の如く碎く星を
と想ひては夜眠を成し坐禪して七日満し山を出く
又英彦山小旗谷を登り最末寺言く從年(豊前豊後指前
の三州小幡)朝言雲杖吐岩峯岩絶壁室下削り成りせり
形家なり九列の一山と僧徒三ヶ社居せりと云へり和尙
法佛を降し大南谷小あり不動明王の言前に七日の系
鏡を勤行し赤心魂を凝し忽憤慨啓後し終ふ式百
歳を懐かしむち小江江人形如来知識、能き佛道修
行せん夏を志し何ちちと徘徊枕禪しく日を歴す才
邊鄙より突出せし事以ては損益友知友も取く冷小

新省此願人坊主を主と諸才又を倚頼し一月程を修す
其前業杖熟く元被行分世家の福の取を安心せし
又北許也一東殿山下に出ぬ煙管鋪仲屋動云法也(不
者の宅に憩ひ和尙古く持神の筑前の産出家杖遂き佛
道修行の志何日か損む屋友知友もなく日々と曠しく
打区ぬ願くは貴家の檀越寺に於て入法屋いと丁
寧に附託せし杖動を扶其志を感賞し許後して即ち
檀越宗考寺に書翰もて損をいひし和尙杖吟ひ寺
にのみ先小飯を勤す(む小飯は俗家
にのみ先小飯を勤す)昼食の儀を怠らじ
勤免夜佛経を習讀しまより民家に生誕未と書る

も習ふを憤激して書家廣澤小然を習方し教く筆法
幾合と其跡を極め模写し既り其師の優過る能書と
成り廣澤の晩年小宗参り

画

入り右家成遂に和尙の書法を問ふと一り儒書も近造
小儒生居り就て入門して一年餘の昼夜となく勤學し
分儒書も漢の筆法に似せし寺に飯師小卷とあり
飯師俗家の其後教内通宗の願成出し九年程回恩し
元明後なり中宗参り歸りぬ其時宗書大に精を長老に進み
法邦通宗に在り既に僧侶三四千人隨從其操
徳思ひ知るし其以 稱言乃取近山室不若授

殿後五牛石柳沢惣吉殿秩禄千三百石此兩表和尙の
言事法成陸面会をなせしより

上聞に達し速く使を池田法邦通宗より招きあり是御
目見在 俣付後年何方通宗の友を惜し終に宗
夫の寺の任職乃 命法家と七八年を過退隠して
武助小山田村に泉庵寺を建立し終り其寺にて隱化し
以て云泉庵寺の柳沢惣吉殿の施主として建立あり和尙
乃の遺を兄弟の印成右遂とて才思くをまとり其の法年
括に在り

甲申倉山

天明三年生寅十月六日各甲曹を被り古安山へ集
詣り山下香明院下朝之時揃ひ安んじく候ふ其入る候

今織部と改

官途主馬助

今改仕して号

吉奥太郎大進

後喜喜齋

吉村平左衛門

今依左衛門と改

田井本之進

今依左衛門と改

長井八郎右衛門

今九助と改

小川太右衛門

宮崎方次郎

宮井虎平太

今物故

正岡牧太

今左衛門と改

遠山仲

今小左衛門と改

萩谷信之進

今清右衛門と改

吉井平左衛門

今庄左衛門と改

井上源次

森善右衛門

後三郎右衛門と改

渡卓右衛門

今十右衛門と改

水間品九郎

今左衛門と改

三浦兼右衛門

持古安山、秋城の東北に安山と云ふ嶺を上げ、

溪路のたな長糸も未済生し漸く頂り近ふして
水邊河を四季枯湯にく湧出ふまより籬木以て黄楊

画

林を以て白石万皆立立是を秋末右をいつふ

崔山兎老ふ絶頂性者秋日氏の居傳政あり今小社を
造りて白山権現を初清き各勉漢しと己の別ふ絶頂小
至り新厨を喫し湯浴ふ山後乃野を古と末の別其兼以
民舎に別日い兵家先生遠山金丸清の報武といふ
言身近藤徳九清の報武といふ西土酒と麻肉を齋
来り各秋方濃食に夜ふ及ん之家乃一盃事とす
三百年来未嘗有此後此年の土三四或は四五其登

る夏ゆれをともせ秋記の夫

牧生太郎聰明

一江都郎臣牧安右衛門子生太郎八幼めにして聰明穎悟
天授の質也未文字の事に習ひま惜哉十五第少して
病を以て死す八歳此時 佛前云其才智の比教のみ
とふを聞古く見ず殊に遇我夢を居床にねめて西果
秋後ふ相造事す。公大山の刀劔を授く糖煎を
に任まし一やらゆと命せす生太郎を辞して中后命
大小二條持てて臣假祀是めて是れりとに表是り法
器を賜ふと賜ふは後郎小後り吾府表に昔命を

均と賜を以る長ら初也然とも長知雅未戰鬪の事には
画用多し伏請後前ハ文化の地と書籍一級たる鹿下
依る昔 府君へ生涯乃思を承さんと云へハ 信前
公感涙を流し泣ひ色と貴賜を多く致し泣ひ其後と
度と百見泣ふと女情式情不那

田中五郎助博識

一田中五郎助ハ討死也少少平の時大主の家には仕へ文學
材好し詩文三味より作らる元へり於且畧大道を弁へ即今
討死中用達の一人形と生曾深漢語一平博多の津屋
屋敷に生動に病氣をてり送國友三桂ハ療治を於日

と板辨材を紙に認め此か赤書なり一日自身赤容林を見
勢業我後四方山の物語り時を移き内門生赤先生の前
小集と送論及及奴其内甚意故と大変る旧物と云ふ先
生と其論我強りとい五郎傍より別急進と別物と云ふ
内生赤大に笑く是下何道の書と聞てつふやと問五郎答
材改免古刻の牛牒ハハハ板一物を書く多くと云ふ
新刻の論を取りと云ふ由新ハ先生頭を下市訪く思案し
はハハ牛牒を聞へ一強一各家新刻あり三宅益順家
産に是を借来きとつハ内生の内人其行三桂五郎に
白じ貴君毎朝谷神を中越え此信及 画

書中(文章)に最(法)る事を知らしむるに前時より関り
如(門)生(色)と説(起)一(質)問(つ)ま(次)せ(さ)る(支)身(端)及
形(三)三(を)論(して)教(法)と(堅)懃(ふ)中(五)助(在)應(辞)退
ま(凡)も(門)生(と)集(り)形(ふ)亦(止)事(を)均(す)決(定)書(を)引(く)後
見(に)三(桂)大(に)發(腹)し(酒)肴(を)出(して)も(て)な(ら)う(ち)門(生)後
と(巾)竹(を)お(し)関(る)に(其)先(五)助(を)説(く)遠(年)と(取)入

石台菴

一(今)の(竹)台(石)店(先)祖(松)店(其)子(澄)江(店)其(子)不(台)
店(之)此(石)台(店)性(質)曾(其)前(曠)遠(不)羈(也)少(き)時(父)江(店)の
勲(高)を(及)秋(博)を(立)退(法)善(以)而(不)悔(阿)ま(ハ)古(林)家(に)

た(を)医(術)の(終)業(志)り(中)年(に)あ(り)志(改)免(何)年
親(の)勲(高)を(許)ま(ん)と(東)都(ふ)下(り)お(も)父(江)店(立)業(成)り(ま)
ハ(人)を(も)て(勲)高(の)只(び)を(形)び(に)父(と)其(志)を(感)し(公)に(願
ひ)勲(高)を(許)し(海)外(の)取(連)行(ぬ)根(程)あ(く)家(督)相(續)し(医)術
盛(に)好(ま)其(名)を(お)よ(う)し(一)果(彦)山(の)子(主)の(室)病(を)く
と(石)台(石)店(石)台(病)を(も)ま(ハ)系(脈)と(あ)ん(名)つ(さ)り(く)属(の外
より)系(脈)も(て)脈(を)診(ま)事(乃)り(石)台(石)店(大)怒(り)又(進)り
病(を)療(ま)ふ(ハ)望(問)診(切)して(其)脈(色)を(尋)と(其)若(む
所)を(問)ひ(其)音(声)を(受)其(脈)を(切)して(石)台(石)店(の)標(本)也
た(も)探(り)知(り)事(を)も(用)る(之)ま(ハ)何(が)や(系)脈(志)と(の

眩暈に似る事療しらず屋交やとく眼を告ぐ彼
んとは是に因て後傳才徳(止言を改まらるる中に入
交を許しずる台店悠とと脈を切し容辨杯徳と毒
く問ひ果致其(ハ種草連幸愈しぬはまハ店主一家の
悦ひ斜有らば其を後事以没く台店を振るはるも海
表並(山海の味其限原意つらん方以酒も既辨るる
台店我傳徳とと大木の根を指し言候以候かを
交に死も味にうりしり候と措武老を以て拈んと
君傳才是をす何あ有甚也大言也己ら意解るれにて
草木の病致能きんや草屨中の病手愈まされなり

懐心を生一たさねらしきよと目川袖門笑り相着るさむ
敬といはれし比極枯り候一山の者才大い鳥居人の
計あはれ草木の造者もまら杯洋到してあのは近む
候きなり時と交名して上を台店とつへり或時 光之公
不勝の事有して 英雲公より花翁を交まらるる交に
外も先台店以んとて其命あられ台店最の草連も交
後一木砂の教山の傳入何初候とくお殿し由し福有
(立越る由十とらまはれこの人。是ハ山以の根也取
つ下賤の服も彼地(乗り洋診候付まに不致のり
なり彼地へ着る草連に眼を改めまらるるハ台店曰我衣

服を医者の仕よぬに衣服を用意せし此居ふも洋診
も仕よ一少も取合はし止まを均き御座に達し
英雲公崩下彼者ゆへた彼の事と何れか一ま時
服をせせとく床に袖羽織下されり相福庵に赴き
捧しては医師通に行務原鷹取の清歴と鐵師の
上坐し悠として曰者今日道中の方れは痛致は床
免河まで大河くらす其後急清醫師を我才子の
如くにあつらひり程は納戸頭集り只今洋診
何付に居ま由命致候へはま下席辭して去私足
痛堪難く何分洋診致し候ま旨致候候下され

此物と案に相違の返答に此人も驚きまはは事
明す才助時洋診乃間女来るも支人洋診るも
ハ床後の論も取交事是非に洋診致されと進先れハ
右席に辭して言稱私如妻の未熟の醫方しく是痛を
去る一氣の流甘さ事事して洋診仕ハ床病情と相分
ま此益乃また此女が公に上船後ハ杓の中上
人として一氣承知の色足(何れ何れも)支換りし先之
公の床前不達ま公座右まハ安坐は免かて洋診候
付よき 画 由くはハとまよりて則安坐し寛りと
洋診し候む福中上退史に相御折理を下はま床

馳走して湯碗三ツに水を盛ると出まよし其に先之
云水を好せぬ色々の水を飲を防いばまゝ下唐に傳ゆる
鑑るたれ其情識を滅除し取り下唐魂を可き其水
よく書付して其一ツを海邊の水能目何程又一ツは山の
水能目何程又一ツは赤土有雨の水能目何程と各々
申上り此水福村の三名水とて其邊の關魔堂の水所
本丸の水を取の水とて其邊の及不博濟大寺此教也
或時兵雲公御茶我を遊下菴其日の上容きり相公濃
茶乃侍身前下唐より下はまり神の項戴し格腹の赤き前
感心なふとくく川と一口小若千きり其日此茶席に

立し大ま其大不怒と下唐を以て其言治日新不届の事り
妻人なるぬ其元濃茶我下まれまは一人かく若千事や
何ふ此供よく何道計雅とて其まは下唐かも略以
公の侍身取直衣服加減ましくれしき感心の録りに若千
まり其公此侍身取を吹唾まの道理聊不審り法
か子細索しして曾く悲懼の色ぬ大ま不怒心り返
の不届持を雅し法庭へ出らまよ其何神に畏とてお
りれ既下打果まへま勢也是我兄て各合人亦よ各人
大まを看先右菴我制し持と扱とも双方互不怒の色
解し既公取入り神ハ公二人を右かま道意に諭

しほ中出りせよとく盃酒を下さけ大まに時服古店
へを朝鮮人參た下はまり三人はは(下)れは名庵大ま小
向く去梅は後への道海は又とはは(下)りし其海海簡此類
多かりし

作谷道帖鑑書

歳摩教子多町警者作谷道帖當年七十三歳親を
江店といふ道帖少全時福多良鑑山崎梅庵に業は後
く鑑名樹園に御書ま奇効多然見すま象言達小
して富美に象や貧賤を憐れ公府より度辟命何とく
鑑書小加人とあま加し辞して世に或年同町酒肆

大屋多事り者親仔手膝下膝満を慈ふる家はま
たき先秋附の言鑑度遠者店原田隆伯西鑑城遠
く作を清ふ日地確く病勢益重し西鑑終に辞し去り
た及作小記を道帖あき笑と某救賤を施すか水勿利し
硬腫頻に散ま目諭まして平愈も歳多にむり仔手り
謝禮として八木拾俵種と東生の大恩心底に限りはむも
當年世帯向不は迫百俵小控微のありたりす志を表
まると中きに道帖とうの返房も及はに取く拾依の
米枝調りたし多言街市帯向不は迫乃由氣の毒下
好是小依く八木拾俵贈進ると中きを以て評は仔手評の及

悲の極うくして或拾遺増りり悲て少民の謝礼の持本
百半を受事返一其の或年長升八郎右衛門家内小
大病人可て扶府の良醫皆を致して験あり道信小常
おと某用を於きに内願くハ暇ある即事り診りよ
徳き才実家長病終究中を被諸言心小任きに其家の
阪の先一後と有れ言ひ翌日恒僕大勢下運本郭とつれ
不系と云前乃町家小く上下盛に行厨を喫ま此爰小
八郎右衛門より案内考出運び行厨を喫を兄と最平
主家近し其候止めぬとつへ何の挨拶もぬく水筒杯
候と喫一報く八郎右衛門所は病人を兄終れハ

あて役あり酒食我盛出はは遠香庵にも振文並り是
杖兄と道信色を交し世今石京ふく酒食喫しせり何
も欲せざと著杖之取ま並をも奪ひ某を合せ並ふ立
帰る主人興を覺しを中來者一言の合報しぬく世あり
飯に翌日某取小きに序人食料をも歸りぬき其爰まで
次病人目を強く事愈えし言ひを謝して漸く又或年用
乃て秋府に來る其言遠藤氏三郎の母長病を床におき
と幸の事して戸食度右衛門を於し案内を折り高右衛門
野傳右衛門前小く酒飯を治し内成りまハ川を安支支
也 画 運の人杖指越れぬ年人とい返言は七三郎の款

ひ傳り酒飲の手當たるに及ばず黄昏は道傍に宿す事
亦るに凌む所へ沈して中夜今も相待に祇に最年月も
所出支所道二里余の滞路を定む本八日中て後れと立
おまわり花三橋の向へ乃家お小商をまき御化ゆる者本り中
形ま候て共三方の方へ津方の由序の事には我母なる者
大病を命且夕に及ぶ候一貼を施し候と云ふまは安ま
事かと打違ひ某我此へ重なる歸る石原の上へ曲を返
時共三方の方より大勢連の者指懸せ候も我も心とせし
凌拓ふお振向ひせしと云ふ御化ゆる事愈々常に貧
民出産所まは酒者我送り候へ産婦の食物振へ思ひ
某禮せても聊なるも更候事と云ふや

田嶋只一牙力

一田嶋只一男は年八十有歳武方人小は合於昔も減事には
長き時朋友と田舎に遊酒の者にも鯛も老尺三寸のものを
おし只一笑く鯛の頭も尾道骨を合せく喰はに足人
大に驚く候し川をわの吸物出川致に毛の加した喰は
人やと只一つと安しとせ加し取く二杯を喰は是等の
其家毎度と人能知ふ

山家妻敵討

一安永九年庚子三月廿八日夕合立敵山家妻敵の侍

浦の下と云所の農家又九郎ある者の宅中より豊前
国中津の藩に使者を遣すに荒井三太郎を遣す
教之次才

荒井三太郎

五又叔坊

三入は坊坊五又

渡邊金十郎

荒井三太郎

但三郎は津島藩の奥平より荒井郡四郎表子と成
同家者然れども其の妻は三郎姉の故に三郎金十郎
為不甥也といふ所以は此等事審ふべし金十郎に渡邊家枝
族の女枝三郎姉分よりと惣友藩の(嫁せしむる事
傳美り然るは後の甥にあはに

一、同年前安永八年三月より以府邸に勤番より其方の
内三郎二族を以て出入りまより金十郎あり
密通せしむる事

一、同年前十二月末金十郎改めまらぬ(三郎金十郎を以て
連れ中は未分一、三郎川と七舟渡を以て分り其志を
する(叔中にては隣国豊後の内所と流浪し一月末當
國に摩教添山村(湯居住)二月八日山家の浦より移
る但浦下又九郎を以て谷水津津性鬼の獨り女は痛を以
て立止る者たるより其又九郎子供大勢及び其より其習
師匠とて一、其家を経理し三郎を以て其後し是

日余に及ぶ

右三平部根元の長崎の表枝志一出川其縁故弁津り
久化とふとの及親久右衛門とて目明を勤免国表を役新
米珍五俵を賜ひ常力地を免さる然るに柳の越後有て
諸魄の身に志事とも月とて八矢張目明を業とい三平部
此久化をゆき事動との仕合ふとく三平部志を連他國
まを免懐也行末の渡世の関東の方統るまや長崎乃
可然るまやと相身はに久化長崎の方道るる在記由中
により同不を志し出れ

一全十部此冬帰國志三平部密通の事志しきりに
よる正自の事志を具一書弁一ぬ國法なき全十部
其俣り持並りく一門中中合降祿指上ま敵打
度取虫指お則願の通大守行答たて僕三人を從(正
自)也。中降出交

但此三平大守より巻子千正路費の爲とて歸ふ全十部
彼久化をゆき其方志れお通るま三平部とてに生弁ぬ何
まの方(限)り居やん是非身出に討るむ(世)の該
よる統の及統るま其方身出に於てハ恩普此
爲親久右衛門役目を並取持其方(更)持は(一)知れ
通りに執持與事典降其爲に伯父也(在)安(おま)ふ(一)

と久化子能更合より久化計ひかく長崎の才
（出）きりまなれ（則）幸十郎將く西を指し行陣し
久化の才義たたと（く）いせん才地取去

一幸十郎先日回へ五越揖斐殿貞殿の西隣目附
の任占れ一書認持書

演表

朋輩荒井三十郎中者私妻の運送出奔候付
尋出討持不中いふ名國法何分難相済は若何願
死致意に道可取中候難計也阪中守置可成
下り心と

安永九_子年正月廿八日 奥平大膳吉次奉申

揖斐親貞様

治色幸十郎

一末幸十郎後此後致意を相尋ふ二月の如前不
得事系行能易字者不出合し及んぬ未遠事
外は中津より十郎の内形と云ふにすし皆去取由
取に尋致し致持書付右所へ申云ふ事方答し此
在探取書

但此傳書つに昔留書と云ふ身は零之屋し此
際今午申中津の舟家の屋付にお居たりと云
ふ事取付所より宛廻り山家より致討所迄

又此在何處

一昨心即の内申様御代官有白書方更名一辨り清
ぬしと云平早うと云わと尋探取

三月初増多一は一物軒を名を信とぬりぬ
伴に辨り隈川と身ぬまより宰府一は大多長延
寺の院家本松隈方と云と云名の方一清ぬ
方の子を配り探一求む平月久化は掃等亮と
ぬり心家に越(家内むと云ぬ)浦下と云所の
又此市ぬあふは更角一と三十市隈家より見
付出一ぬきむしと一茶と云と三月十その古

又也

但此取女と云久化(一)と云此所(一)年と云し
也と尋り探と久化中隈高亮と云(一)肥后
(一)新越也中津(一)七何相和智事と云(一)女子と云
のみ若長着物をツ持余段一をり法おは女
活取能く入身ぬぬぬ世の室事(一)古遺
一久化中隈母子と云と云と娘事立退
後何方(一)思ひ得る式此を肥后(一)新越か自
然出合と云(一)其の時此而平後一是と云の由
事一杯と其ぬ根もぬれと云休息

母よりあふと古石終久化持年の事重十郎は
あつ九頭へ其越母の前（以て大機取くそ十郎に譲り
けり）女子の古石れ下能に密に病し中居しぬ
そもき心かたりとて又古石取法取持来りしに
に安治治承人使とて也

聖朝久化中振返其甲片末治少女也（其時又
い主事一爲を能く）（此立出立に事府（立返
し事平市）解画 少と松隈

方と治方（外）に此時重十郎物方即を廻さし中）
此と追ふるに（事）を治十七日に在田村を身

逢事れ松子年安共其夜相遇し事府の松居に立返り
但重十郎何子に能く先り治を求むまゝ方共
智及人の名未安也此不事府（立越）時七又物取
三笠即所三郎の夫は松居先代友の姓在り池し
を扱すに地取所之坂取斗ふると新成事かしと
一三月十八日に事府出相伴ふ者久化傳右衛門と傳
名人即今上平人なる事村前通る吉木村より山吹
村抱多越りし女少居を傳い捨居事といふ小松立居
由りて事者相得所

但久化の此度五時前浦下二十町より相越へりといふ

久化おそれいふ招く戸を以て系に三平市より取置
を引継ぎて折所共重き本項を引替へ久化中
に此間大なり中世流成り成りなり紀後(相越り
百箇年迄を疎儀出来候に思は申候(帰乳
也又之れは巾着にあり候度と云ふは平の際
(後を以ては淡路の両三平市に便や候人等と
思ふ今三平市にいたる迄も久化初とて之を三平市に
思ふ

三平市金十市(新)に思はれ候候に候はれ候
と云ふ三平市(新)に思はれ候候に候はれ候

と云はれ候に候はれ候

但此三平市(新)に思はれ候候に候はれ候
三平市(新)に思はれ候候に候はれ候

三平市(新)に思はれ候候に候はれ候
三平市(新)に思はれ候候に候はれ候

三平市(新)に思はれ候候に候はれ候

但三平市(新)に思はれ候候に候はれ候
三平市(新)に思はれ候候に候はれ候

三平市(新)に思はれ候候に候はれ候
三平市(新)に思はれ候候に候はれ候

盤子(重箱)に括り括りて(脇指)の端(文)地(と)り
に(き)り(類)口(に)三(斗)斗(や)四(斗)と(す)事(乃)作(む)と(取)
後(三)段(に)集(り)久(作)た(の)有(き)長(妻)に(矣)

但(女)と(其)お(う)に(外)き(う)と(い)ふ(つ)事(大)息(継)さ

る(ゆ)久(年)平(節)基(て)三(年)節(に)引(ま)る(ゆ)め(め)を(以)て

一(室)十(市)の(米)束(を)人(女)と(又)九(節)方(節)一(室)と(す)事(乃)作(む)と(取)

中(一)年(花)中(法)遠(を)平(節)方(節)と(名)を(取)三(年)節(一)花(女)と

不(討)附(者)是(是)と(い)ふ(大)化(慶)一(立)越(相)庭(と)多(死)

數(元)と(抄)に(指)中(五)

一(此)取(九)付(頂)至(平)節(大)法(知)之(下)一(立)越(他)て(和)

か(女)等(候)と(奥)方(信)吉(史)高(中)切(迎)三(年)節(一)節

七(女)如(口)忍(甲)一(見)并(三)年(節)方(節)と(名)を(取)事(乃)作(む)と(取)

し(尚)村(抱)浦(下)又(九)節(信)吉(史)高(中)切(迎)三(年)節(一)花(女)

吉(不)只(今)討(め)と(法)子(法)不(法)之(通)り(括)り(と)法(慶)

是(不)依(て)取(出)物(を)中(付)異(法)と(の)事(に)付(別)と(行)法(知)と

去(者)方(一)依(法)中(付)と(い)ふ(役)人(一)括(り)以(て)其(付)た(之)通

豊(前)國(奥)平(大)法(吉)史(高)中(切)迎(三)年(節)方(節)と(名)を(取)

者(子)妻(被)り(以)女(吉)史(高)中(切)迎(三)年(節)方(節)と(名)を(取)

并(於)中(一)右(死)候(法)國(法)中(切)迎(三)年(節)方(節)と(名)を(取)

安永九年三月十八日 奥平大板方更本

市役人市本

湯邊左十郎判

聖光日初より出役たし通実本門道恒江是恒人

聖光河村五左衛門側簡江候使役長次湯左門中村幸

次側簡江門人死敷伴孫次郎石川橋元側簡江門人侍

差法虎中谷甚八郎在存

向昔邦刻通河村五左衛門浦下合至十郎及下

村十左衛門よりし治事越又此等治事何本立合至死

致所指し品相改

改之節之合と云

中津藏中

湯邊左十郎

候使

河村五左衛門

代官

古河十左衛門

側簡江

即事之付或人

下代

或人

大庄屋

庄屋

年

本之外市役人有

一氣并三平市此所

面之新 胸之新 右腸腹四之新

左手之新 右臂之新 右首之新

咽 舌之新 右膝之新

後之新

右肩之新 左腋下之新 腋腹之新

右足之新

但市律約布子細帶者用

一女此新

向頭之新 咽舌之新

但市律約布子木頭形并帶

三十市若女取智之果之改志上古河十多廣沈小左

如河布五處行一院板用者是左之相

荒律二年郎分 画

一刀一腰 和象好友厚固定

白數 目貫 多甲之果也 淚頭 跌唐至扇

系黃緝譯遠一 紐一 至空省

切羽金平繩目刻 矜目赤洞 鞞虫吟余

心緒寸寸打免耳之

一服 絞 目貫 在赤能所 淚頭 由四步一石用宜眼切

糸煮縛 透し 切物重器

迦空融か石 鷲目減量 下流汝河打

新南冷金 小柄表末細七子 籠長物 籠金

小刀 伎前長私法天

一刀物一

白鏡 目景上坐折板 取頭 茶四号全點吟
居物如普竹取

糸煮縛

右の扇数小刀具名記ハ服あふ

一此数改相澤し後流也至十市ト河右云々

折去片 古付在

貞平大棟古美内流并三平市白月中旬之江和妻

連浴お奉い依之守出改書古連中及台致連中

悉飲之通流中付早連因之出立為表而取代障焚

鞆頂相連其板方、お良り急少糸煮糸十流共

心内山系おの、及中内粗取付石連、名之由

庵老兄而之せ、及右村し古生又九平、室永工

折越右之舞越其改在、各人古付西カ右村大

流屋武方、古越古之、古居、古居、古居

安永九年二月廿日 奥平大膳 後述、古平、郎

北野侯様之次

一 大官

長官同原
三友共奏

但方人北野川原之始階

境沢控之儀は法蓋故也大日原に復置

一 吉日屋八平時治後人引取

但河右及左系五羽書計取

一 至十市旅宿は此伏其隣重州より実在九条一宿

御是至十市旅宿志の由折之故在右門至十市旅宿

下見出出来終

但方の上は内史と唱ふ之方任持人御最改名人

至十市旅宿に請ふ者是之三人の御公国の安

あり

一 三月五日初より平井新八使者と云々計陣

古越尾河平次郎と云々御公国迄言ふは後迎至十市

侯義の御是並に若舟比船別文侯座に申すは八

折通し海下系下之船久世よりの人柄は持之向折

今より侯御分は御許に御公国より使者指立

は格是也言ふは御公国より御公国に御公国に

則候老中評決の上通言是は御公国より御公国に

出候は先矣平曲御公国に御公国に御公国に

一生廻一折 至子五折文

祖右の河合公彦と書く書状を所伝家へ
とて贈る

一聖書口河合公彦と書状の旅歴を要越して
西使舟海を渡り人柄の好む此天候に於て
支那府北東の世に於て多岐山を越して
居るに至りて身命法に奉り祀儀と此の
甲申中居るに昌表と書状を贈るに
只とて後人指す中(西)の府に於て
但何れの子を以て書状に之を
西宮に於て新設す此の書状を
先年之及に傳へて之を
入朝の儀に於て此の書状を
し

一月二日申候より日付後水滸榮右所
人山本殿に事あるに於て
加に相教に事あるに於て
之に尤不忠不義の者ありて
之に尤不忠不義の者ありて
下より之を何事由か
と申す候に則ち別為り申す

栄右衛門左衛門と波長は屋敷内共、字石神
と結縁を後程おし奉り奉る

但平市川屋敷の外町持の御孫と居る御孫

相廻り

四月朔日申付使者思ふ事（奉りおし下付）河合

より以来と下上人運送の御孫御孫と居る御孫

と御孫の御孫御孫と居る御孫

會所出方 野原 丹 権方史

阪次 若原 津田勘兵衛

池妻渡 日 尾白又平

日 毛利林少助

近巻 大段 飯田孫左衛門

大段渡 大森 中村彦四郎

贈物役 右日 味長利吉史

及舞 赤巻 毛利白龍

一四六日申付の御孫山本屋敷事御孫占付迄平井
新八所奉り止留

但増より山本迄の同通御孫迄御孫屋敷内

と一と奉り御孫占付二口市山本迄御孫屋敷内

御孫御孫より下二口山本迄御孫屋敷内

口之迎死亦事

一日七日... 之四

平并... 人

冥... 在... 也

在... 也

何... 也

何... 也

中... 也

水... 也

一... 也

真... 也

... 也

... 也

... 也

... 也

... 也

... 也

... 也

市酒一樽

四月廿五日津田初志街為使者中伴之相越

市是

津市河之志以新跡至及以然其後任後志全十市

一併 宗前社所使者目録之角 病魚以東志之入

以之故故以換打候其之 中連以陸目録之通

津達預之修也

相乃生納片請地

二及

蒸海氣

一桶

忍冬酒

一瓶

一申 相使者至乃志更河今以多公來而人之酒也

志在申之贈物尤之有

椒海蛇

一桶

金子

五百疋

於申津田初志街 田會之角尤之有

町草力 相乃田次市更

取次

養者男

小津即大東門

換打

黒乃志才更

馬也

河合波節志更

相伴

加取

立本新志更

同

医师

幸島英介

医長

用人

幸名次左中門

〃

常戸

竹中次右中門

又也

乐者

透見之馬

一箱賜
一書日勤活放定竹下次左中門並使者と一紙

中津より挨拶左中門

至子三右足

膳内凍沙節

右同

河村云多術

〃

関 春左中門

〃

平井半八

〃

古河小玄半

日向足光

側筒四人

〃

那半次竹三人

浪戴面充

夏唯 八人

右同

下代 三人

宿役人挨拶

至貳百足

大正左 武六

浪 五右

正左 次八

日向 三五

年寄 勇助

右曰

町奉行

美石法

右曰

曰

浦右衛門

曰爰

曰

重助

曰或雨之

組頭

を貳百寸

を十部

元化

を云ふ

西村

多目

場

六人

此之板

浦下

又九

以

郷奉行軍源

一其の年我藩役大に召し人々を懲る是を依て
 官市井に命を許す教を教諭し之を夜九を逐拂ハ
 一公洗卒少流を致す是を執り助く我の身
 天地を危し敷聖の同望をり少友を許らし十回
 五丁南に首割とある之此等の御幸に又右州門
 あり者を性武を夜九居る此の懸解を此を
 此の世を少僧に村中に願を流し新原に集
 集ふ等秋月ハ大事起りた里を流すこひ助相
 是こひ是助相願をたに多流を編撰し石
 ほとんすを指教を致す及く流す事とを退事

あつち 陸路徑に埋るるを萬天小冬平とて立
陣押し長谷川の波にありと夜露途行
の事行指し國家奉平出度し目お及しと價
いと後子とて其身取しと時早ぬ

妻右木門深岐

一教演敗四三落村の真家名今の妻今祖父妻右木門
生均為家強の者あり家世富財巨萬なり此方付其強に
物と為し生家日と逐に富り或時筑後五室と信し
大正と妻入り竹とをるるに彼信之平とて近新外ハ
妻右木門大忍り大道と通るるに和と年歩に

兼と若物の子押（此筑後）の者大なりと望く思ふと云
候不及りお堪んを惣あり妻右木門此妻と知り夫
をせし此言候ア白海巻にわたを記物柳に候
事ふおま堪儀敬をうし大智と對治し後
流波刻み及い良きと妻右木門を席し妻とてお
流と呼ぶと云ふに聲ありと流しと妻とておの暖
簾は曳り河きとて流石と放ちりおしに彼大智のと
の大お其身と風と木の葉北教好く散りに候と敗き其
申き人油の上腰とておと老弱とて女に風油の
石に入ると是とる春と起人を敬ふと大徳に

とよきるのまふふはつ是さる人付遠に生捕上
とよきるのま

雀其平景氣

一

雀其平の号其服支丸うく雀乃并之河
川之志流乃冷り似可小舟一海一之川
能口利て人の思ふはる時花京海舟中
障子あゆむ其の神像如座人明多秋尤む
少し七騎、片寛と便し信通用し深志平
て著久一うりくと云持乃さるる者
通ふ六(やと候ふを中)海に(神)其年

次用人役其平後也仙友其妻也其人あり

画

蛭子不^ああ

一和深あ今年七十年三子以前大罪の名三人をこ
の長和雄雄石の河原わて形せれまは其大治
多果青せらる致公並居者に今は居る者其遠の人
の酒をいささく若り(けし)其法其の首を
居人を怖しむは其酒の本居る者其の居平生酒
食ち責て業を其母をいささか其酒をいささか
若るをいささか其酒をいささか其酒をいささか

に老漢の言はる事首を以て入して強しきと變るる
居るも競事も又酒合をなす老漢の眼てまはす
度た止事終つるも後に入して終つる言を求るに又入
つて終つる言はるる老漢の言はるる事もまた
来しと思ひ居る事も終つる事もまた
しと終つる言はるる事もまた
れと終つる言はるる事もまた
見終つる言はるる事もまた
能く思ふに此の時一光安の故実を存する事
居るの言はるる事もまた

此書の中首と終つる事もまた
の物もまた終つる事もまた
要りし事もまた終つる事もまた
さうたに今迄しと終つる事もまた

清和殿を奉て法法を以て人の言を以て事なす
言辭屬正居る事もまた終つる事もまた
案て改る事もまた終つる事もまた

馬士十平

一馬士十平は公の終つる事もまた
言辭屬正居る事もまた終つる事もまた

此唐摩度の事は素多布の記路に由に
ゆゑに我唐を誣ぬ他人亦色に驚く刀を
拔て唐の向ふ振金為馬下り下り馬傍を去
の汗の上ふりて唐を去るを忘れぬ馬士を刺
と射を止た馬をよき言のゆゑに引入せぬ
以て去りて振金たる刀の端踏居に當りぬ波
士大に驚りて刀を去るの邊に何の如く驚居に
當りて去りて是れを代の什物取に取る事
此作に記す主人の言に由る事なり
置りて馬士大に驚りて去る事なり

論平唐を以て辨を以て唐を以て唐を
り列しんれば甚き事なり下録する乃紅業唐に
乃平くが久くも布に和を希希以て和唐論
且一々言を唐に由る言をか唐に最上の言なり
去録 一止上言もは後十年を去る事なり
平唐を以て唐を以て唐を以て唐を以て唐を
此唐に由り唐唐の付何如に唐唐十年計
而唐と唐を以て唐を以て唐を以て唐を
對唐を以て唐を以て唐を以て唐を以て唐を
唐唐に馬士大に驚りて唐を以て唐を以て唐を

東に帰ると中野の下婢の如きなり中野に
くとも(三)に中野の如きなり中野に
由らば(三)に中野の如きなり中野に
格の(三)に中野の如きなり中野に
中野の(三)に中野の如きなり中野に
入(三)に中野の如きなり中野に
誰(三)に中野の如きなり中野に
客(三)に中野の如きなり中野に
中野(三)に中野の如きなり中野に
中野(三)に中野の如きなり中野に

しと其(三)十人の内(三)一人(三)と(三)捕(三)ぬ(三)官(三)に(三)許
お(三)と(三)布(三)し(三)ゆ(三)る(三)客(三)を(三)入(三)り(三)て(三)筑(三)後(三)境(三)乃(三)大(三)川(三)に
り(三)皆(三)打(三)殺(三)せ(三)し(三)り(三)下(三)婢(三)中(三)義(三)林(三)と(三)い(三)は(三)れ(三)り(三)
と(三)述(三)客(三)史(三)の(三)下(三)女(三)と(三)仇(三)儼(三)を(三)焼(三)の(三)祝(三)金(三)と(三>い(三>は(三>れ(三>り(三>
と(三>余(三>汁(三>時(三>一(三>家(三>と(三>い(三>は(三>れ(三>り(三>今(三>た(三>に(三>は(三>は(三>の(三>恩(三>を(三>承(三>継(三>ぐ(三>べ(三>し(三>ぬ(三>我(三>あ(三>ら(三>げ(三>る(三>

太郎治記

一(三)嘉(三)摩(三)忍(三>蘇(三>田(三>村(三>今(三>北(三>に(三>在(三>る(三>者(三>即(三>治(三>市(三>上(三>格(三>斗(三>客(三>
と(三>お(三>り(三>て(三>早(三>肥(三>外(三>に(三>天(三>生(三>喜(三>家(三>入(三>天(三>下(三>に(三>双(三>走(三>市(三>
吉(三>田(三>七(三>郎(三>吉(三>平(三>の(三>友(三>夜(三>と(三>い(三>は(三>れ(三>り(三>今(三>た(三>に(三>は(三>は(三>の(三>恩(三>を(三>承(三>継(三>ぐ(三>べ(三>し(三>ぬ(三>我(三>あ(三>ら(三>げ(三>る(三>

郡中の庄屋十餘集めて油米乃油子とを果すべし
此事一村乃納高池（きり）物（向）故（き）（き）
既（下）法（庄）屋（一）度（か）り（油）子（と）始（り）時（を）お（よ）し（可）を（能）え
所（一）古（事）以（り）越（え）お（こ）し（一）人（別）の（物）子（中）何（れ）何（れ）
合（何）人（律）に（古）池（は）も（池）か（り）水（を）さ（ま）し（満）し
難（し）と（書）付（り）人（其）信（何）道（徳）人（中）を（疑）ふ（所）
て（晚）方（に）女（り）宿（下）す（り）物（而）を（所）寄（り）今（ま）ん（り）
美（不）高（髪）も（遠）く（こ）し（と）を（人）許（ま）さ（る）也

坂中寄九郎勤切

今（の）坂（中）行（担）又（も）甚（だ）し（代）官（の）御（お）お（り）の（由）

古（巨）遠（より）大（地）上（り）夜（と）無（械）と（強）ら（ん）は（度）夫（二）才
乃（子）徒（死）た（お）て（と）遠（の）火（災）な（ま）し（か）る（所）段（の）秋（う）末（に）
う（先）代（官）の（子）元（服）ま（さ）し（の）用（事）又（法）書（付）け（り）を（き）し
難（お）ら（ん）由（違）り（を）ま（し）す（来）の（人）愚（此）等（も）時（の）に（は）
用（は）も（有）用（の）取（合）も（似）く（大）事（の）情（由）也（り）程（に）
入（つ）て（ま）つ（也）生（助）先（に）持（味）す（事）と（此）度（も）其（通）不（持）を
以（り）前（に）一（張）を（焼）き（り）し（と）も（又）お（り）ま（す）と（大）
夫（の）言（つ）た（り）し（後）も（亦）な（ま）ら（ず）あ（ら）ま（し）ま（し（る）母（の）言（事）
横（垣）迄（の）言（勢）に（同）次（り）家（内）に（及）ぶ（公）同
此（の）言（事）と（一）礼（式）を（進）め（俸）禄（を）か（指）は（り

友竹粘工

今昔人と別れし友竹を牛也細工に於て粘り世
人天下と良之粘り 云淡き魚の筭製せしむ
日月を漸く辛業に有司共運りて尤む友竹笑
の筭を望に並其上上斗入る未後と今昔粘り
改くとりまを主に算寸もたるまは又本邦一途
状さるるも筭を今に一年改論りて製し流る
有司共運延と良業を事しるを怒りて細工に
友竹を昔工美器藤玉等ややに品千載破也粘り
しるとのを用やはと並水製を判りて世を造りし

友竹を改め奉

公の命を更を初る所也

坂向先鋒酒量

一切田植草の如く既隊の先鋒也同夜夜所共出り世は
七のたまを流し向及強りん相くたま能中をんて
今日坂屋一室中の言年只そ人余八階此等酒客よ
大盈を以て友人一盈也て坂屋一我人の如何を中
る流るる多笑を唯に相事屋にぬふと十七人
人盈を指す三合玉入る一更先初て坂向つ指し
指一吸りしと順を述て十七盈程物の数をを以て
二三盈干に十二盈酒客各大小可まよりき友

蘇三郎亭の猿樂乃存るを踏又和に伴ふ故田後吃
中所考は返存以るに立多又狀研收十盈と此
二十五本積る一盈之合二十盈の算知くし法客の
只一盈より研可也

四藤浮海瑞

一今の血を森若年所の者より同者又若印に長し血
友のとき其研井と案に少き時下の案一遊一抄
拓大板返者もぬき下居しり抄多き一遊居を(家
由等をやつてけの板駈くと一遊せんと三味線箆を因
友のり一脊多おの研心と在ひる等の布子をいつた

て彼川ホニ及至才程に立立者をもあて下の園を敷
しと久く程不其日乃昔以飯塚の駅のみし前以所
島とぬんしつ下着ぬ下しと神を月の半津し
海志も久時々の終る多しを肌をくぬしと怪
き小家に立妻の体は五尺もふ雨は降りし階ゆの
し早と急ぬ心を持くしと其家に一茶をてしと不
いひぬがき、ぬき物と次の駅よてかこつとを幸ぬし
つと下地所らの一遊お一駅とと立上り無くと物と十
里余の道と自らをよはつたにさるしと下居く体はひさし
出て平と足引道に彼せと案しは折しと要ふと

味限の音沙(一)も味乃まに詞亭亭主の味限
きりやいふやとまの是に比さのすあましりふの師匠の
ゆに甚ゆるふしりたふといひ友吉音(一)て我をふ
れ事(一)は種(一)友吉と何幸也及に大南(一)と文
わらわ(一)無(一)と(一)は神もま又おまを又る母を何事
能深由春を(一)是中能(一)と立地(一)と相撲能言杯の宗
村(一)何果の市(一)常(一)も(一)な(一)ま(一)古(一)三(一)味(一)限(一)
と瓜(一)と(一)事(一)に(一)事(一)の(一)肉(一)并(一)其(一)の(一)舌(一)か(一)あ(一)ら(一)う(一)
る(一)ト(一)終(一)り(一)の(一)業(一)に(一)及(一)て(一)考(一)を(一)出(一)し(一)筆(一)と(一)集(一)欠(一)
世(一)に(一)正(一)し(一)た(一)友(一)吉(一)其(一)古(一)三(一)味(一)限(一)の(一)取(一)手(一)一(一)河(一)子(一)

を(一)合(一)し(一)り(一)出(一)し(一)る(一)人(一)も(一)無(一)知(一)び(一)し(一)る(一)方(一)も(一)何(一)妙(一)也(一)
一(一)事(一)と(一)言(一)ふ(一)に(一)れ(一)に(一)ゆ(一)る(一)其(一)三(一)味(一)限(一)の(一)人(一)と(一)凡(一)
多(一)敷(一)包(一)け(一)た(一)れ(一)ゆ(一)り(一)と(一)は(一)交(一)り(一)の(一)妙(一)又(一)一(一)事(一)妙(一)也(一)
若(一)向(一)ふ(一)と(一)い(一)ふ(一)斗(一)ふ(一)し(一)妙(一)な(一)友(一)吉(一)其(一)古(一)三(一)味(一)限(一)の(一)妙(一)也(一)
むに任(一)ま(一)て(一)色(一)も(一)淋(一)さ(一)な(一)し(一)て(一)行(一)く(一)不(一)我(一)人(一)の(一)威(一)
入(一)り(一)の(一)所(一)と(一)い(一)ふ(一)人(一)も(一)無(一)知(一)び(一)し(一)る(一)方(一)も(一)何(一)妙(一)也(一)
存(一)り(一)ま(一)く(一)何(一)も(一)人(一)秋(一)月(一)の(一)血(一)存(一)存(一)也(一)人(一)の(一)妙(一)
音(一)に(一>一)一(一)四(一)友(一)友(一)を(一>一)一(一)は(一)は(一>一)一(一)は(一)は(一>一)一(一)は(一)は(一>
何(一)田(一)那(一)と(一)我(一)に(一)は(一>一)一(一)は(一>一)一(一)は(一>一)一(一)は(一>一)一(一)は(一>
の(一)妙(一)平(一)也(一)一(一)は(一>一)一(一)は(一>一)一(一)は(一>一)一(一)は(一>一)一(一)は(一>

んとも勢い自家の初きを中とたさ起て致す夏吉は
く舟をこし敷中及申を此反下の突より大板は
たふすといひあきし芝居のうきし舟も此方の一人
加月くさし信は是はこゝれの為に越さる何年
此方の芝居がうては具願下りしハ後御に古物か
かきたると下等に神も一人信もあふよとま
すといひのて御神く芝居も始りて血友の神
利壁しむ花前山の所へ古今一人の大出をよま
し〜血友此丸玉に度りぬ

善四節知死

一夜は初平海村御市ハ一舟並に給地の七民也生所温
順^順其想中不^不と人子一言行世に其^其大^大めを
人信知る海^海温^温ま好人を渡す幸^幸あまんと云^云去^去年^年下
生^生那^那三^三木^木村^村知^知色^色大^大友^友此^此方^方（竹^竹杖^杖の^の春^春死^死ぬ^ぬ期^期と
名^名録^録り〜日^日津^津海^海温^温と^と渡^渡る^る者^者（子^子孫^孫為^為す^す年^年）
無^無事^事の^の二^二石^石牛^牛の^の船^船を^をし^しり^りと^と交^交渡^渡る^る振^振鈴^鈴と
と^と自^自身^身も^も傷^傷者^者杯^杯買^買神^神（大^大友^友飲^飲と^と屋^屋）と^と白^白陽^陽
と^と大^大友^友と^と平^平生^生と^と大^大友^友は^は知^知る^る路^路を^を登^登る^る事^事
と^と大^大友^友と^と平^平生^生と^と大^大友^友は^は知^知る^る事^事と^と大^大友^友と^と平^平生^生と^と大^大友^友
と^と信^信〜と^と大^大友^友と^と平^平生^生と^と大^大友^友と^と平^平生^生と^と大^大友^友と^と平^平生^生

んは努に因り初き事とたさ起て致し夏吉は
く我もは教中及申は決反下の突も大板後
を事とし此れを芝居の事し我れ此方の一人
加れりきし依り是は此の為に越り何年
此方の芝居がうては夏吉の心は後仰に物か
かきたて下等に神とて人へ傳ふ及よとま
すも此のよと能く記り芝居を始りん血友の傳
利覚しは此花山の所を古今一人の大由是よと
く血友此れ九玉に成りぬ

昔四年知死

一夜は即平海村部一弁並に給地の七氏也生所置
順に其想と不交をた人あり言行世に其心ありを
今信知海海邊を好む清き事よまると云ふ事下
此神に云ふ村部己の友此方(竹杖の春死ぬ期を
名録り一白海海邊を清き事)子孫為す事
能くし二石平の地をしんま交被領の板(と
て自身も海者杯買神(方不飲を屋)堂白降
己ぬ友も平はよふ友成知は路を志望の事
とも云ふは唯不思儀也事と云ふ事と云ふ疑ひ
半信しと云ぬ南二月十二日一しよ子孫集

